

『新しい学校』一九五五年八月（興文館）

【主張】

教育の進歩を生み出すものは何か

敗戦直後に行われた教育改革は、無血の革命と言われた程、根本的だと考えられた。それから十年たつて、近頃問題となっている教育問題の発生理由を考えてみると、十年前の無血の革命は一向に成功しなかったのではないかと思わせるものがある。どれもがうわつらの付焼刃でしかなく、もうすつかり地金が出てしまっているといった感がないでもない。いわゆる教育改革などということは、十年や二十年で成立つものではないのであろうか。

近頃取り上げられた教育問題の一つに教科書問題がある。それは思想問題もからみ、利害問題もからみ、極めて複雑な様相を呈している。よい教科書をつくり、よい教育を行うための検定制度であった筈だが、雑誌の編集と大してかわらない編集でどの教科書会社も、決してよい教科書を編集しようとはしていないように思われる。口ではそう言うけれども、本当によい教科書の編集を考えているか、怪しいものである。教育者が本当によい教科書を採用しようとしているかということも、疑なきを得ない。タブーになっていて、誰も口をおおっているけれども、実際にはどの教科書でも五十歩百歩だと考えて、だから利害に引きずられて適当にやっているのでないかという感がする。教科書制度に関するむつかしい理論も結局は一へんの理くつにしかすぎないのではないか。

一般大衆は、昔の教科書の安いことや国定で誰も同じ教科書をつかっていたことが、忘れられない。同じ教育をうけるには、同じ教科書

である方がよいと考えている程度である。こういう大衆の要求はしかし根強いのである。政府が問題にしなければならぬのは、こういう人々の意見である。

こうして、教科書問題は、だんだん行きつく所へ行くようである。それは無血革命の理想とは縁の遠い到達点であるようである。それが日本の実力のしからしむる所だといってしまえば、それ迄であるが、実際にそうなのである。

教科書問題が正しく解決されるということは、それを正しくつくり力が出来、それを正しく使う力が出来て来る事であるが、そういう実力のない所に、制度ばかりあっても形だけにすぎない。体裁だけでは何にもならない。

これは併し教科書制度ばかりではない。教育の様々な分野においてみられる現象ではないだろうか、今年も夏休みを返上して入学試験準備に狂奔する中学校、高等学校が問題になっている。しかしこれは何も夏休みばかりではない。中、高等学校の全教育期間が、入学試験を目的として統制されている学校は数多いのである。といって中学校、高等学校の先生がどうのということを言ってもはじまらない。それは親の希望でもあり、日本の社会の要求でもあるのだろう。しかしそれによつて、本当に人間をつくる教育が阻害されていることも疑うことの出来ないことである。つまり日本中こぞつて人間をつくる教育を邪魔しているのである。これも日本の実力といってしまえばそれ迄である。六・三制が、そういうものを克服するためのものであるということとは、もはや夢でしかない。

教育の実体の進歩ということとは、中々出来にくいものであるらしい。何が、歴史の進歩をつくるのか、人間の精神が生み出すものであることは間違いないが、それはどうして、進歩するのか。

（*無記名）